

道海史



一宮の軌跡をたどる

原始時代

一宮は長生郡を流域とする一宮川が太平洋に注ぐ河口に発達した町です。いまから約5〜6万年前に、現在のような房総半島が誕生しましたが、縄文時代（約3000年前）になって一宮に人が住み始めたことが、町の西方にある貝殻塚貝塚の発掘により証明されています。貝塚からは石器の他、鯨、サメ、カメの骨やシジミ、ナガラミ、ハマグリなど貝類が出土しています。

その後、豪族が出現し、やがて大和朝廷が成立。こうした権力者たちの墓と推測される横穴古墳が町内数カ所に分布しており、柚ノ木横穴古墳もそのひとつです。

古代

飛鳥時代に入ると、房総に安房・上総・下総の三国が誕生。相模から走水の海（浦賀水道）を渡って、上総、下総そして常陸国へと古東海道の往来が盛んになったのも、この時代の特徴です。一宮にある玉前（たまさき）神社が、上総一の宮に位置づけられたのも、朝廷の力が東上総に及んだためでしょう。

雅な印象のある平安の世は、実は、武士たちの争いが絶えない時代でした。房総では、平氏一門の千葉氏と上総氏が地域を取り仕切る武士団として台頭。しかし、房総三国で起きた将門の乱や、それに続いた幾度かの戦乱で、土地や人々の暮らしが荒らされたことが、容易に想像できます。



東浪見寺仁王門



貝殻塚貝塚（町指定遺跡）



軍荼利山植物群落（県指定天然記念物）



東浪見寺本堂



木造軍荼利明王立像（県指定有形文化財）